

低線量の長期被曝の影響と課題

～フクシマ事故を受け我々はどう対処すべきか～

ECRR（欧州放射線リスク委員会）のバズビー氏は、「日本政府が年間20ミリシーベルトまでは安全と主張しているのは言語に絶するほど間違っている」と述べています。

一方、英オックスフォード大名誉教授のウェード・アリソン氏は次のように断言します。「ICRP（国際放射線防護委員会）の年間20ミリシーベルトはあまりにも厳しすぎる。私は1回きりなら100ミリ、複数回なら月間100ミリ、生涯を通じては5000ミリシーベルトを提案する。それでもガンの放射線治療で健康な細胞が浴びる月間線量の200分の1に過ぎない」

このように甘いと言われるICRPの基準値をめぐるでも大きく意見が分かれています。私たちはどう考えていったらよいのでしょうか。

ぜひご参加ください。

岐阜環境医学研究所所長

講師 **松井 英介** 先生

とき **3月15日** (木)

午後7時30分～9時30分

ところ **名鉄トヤマホテル** 3F 薫風の間

参加費 **無料**

申込み 電話または TEL 076-442-8000
FAXで FAX 076-442-3033



「反核医師のつどいin埼玉」の第三分科会にパネリストとして参加された松井先生（2011.11.5）

松井英介先生は、「内部被ばくを無視してきたICRPに対し、ECRRは『内部被ばくモデル』である核施設白血病、チェルノブイリやイラクの子どもたちをあげ、線量限度、許容リスクを低く設定している。日本政府は今回の原発事故による被ばくを、ICRPに追随して高く線量限度を設定している」と批判しています。

松井英介先生のプロフィール

1938年生まれ。1964年岐阜県立医科大学卒業、元岐阜大学医学部助教授(放射線医学講座)。現在、岐阜環境医学研究所所長。専門:呼吸器疾患の画像および内視鏡診断と治療、肺がんの予防・早期発見、集団検診ならびに治療。

共催

富山県保険医協会 核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会

参加申込書

Fax 076-442-3033

放射線学「補修」授業講座の
参加を申し込みます

申込み代表者名 (医療機関名)	私を含めて _____名
--------------------	-----------------

ドイツ在住の梶村太一郎氏からの「報告」(2012. 1. 7)

松井英介医師の講演と 内部被曝問題研究会

松井英介医師のベルリンでの講演が、1月4日にベルリン工科大学で行われました。同大学の特別講座のひとつとして行われたので、写真でご覧のように、学生たちにまじって、25年前にここで試験を受けたという物理学者や、またチェルノブイリの救援を行っている医師たち、ベルリン在住の日本人のみなさんも混じって講義室は満員でした。



松井医師は若い頃ベルリンの病院で学んだこともあり、ドイツ語も堪能なのですが、資料の大半が英文なので、英語での講義となりました。最初10分ほどは、少し独英語がチャンポンになり、苦笑されていました。それも最初だけで、90分の充実した内容でした。

講義の重点は国際的知見として、無視ないしは非常に軽視されている、低線量の内部被曝の最新の研究の解説ですが、比較的良く知られている遺伝子の切断だけではなく、体内に取り込まれた放射性物質が細胞をどのように破壊するかについての最新の知見を図面などを使ってわかりやすく解説されました。

「市民と科学者の内部被曝問題研究会」を組織

内部被曝は学問的には、次第に解明されつつあるが、まだその途上であること、他方で、核兵器使用での外部被曝の破壊力については、ヒロシマ、ナガサキで周知のこととなっているが、内部被曝の破壊力については、膨大な犠牲、例としてチェルノブイリ事故またはイラク戦争での劣化ウラン弾使用による被災住民やアメリカ兵の悲惨な実証されている事実があるにもかかわらず、原発推進政策やアメリカの核政策のため、無視され隠蔽されているということです。

講義の終わりに、松井氏はいく先月、「市民と科学者の内部被曝問題研究会」を組織して活動を始められたことを報告され、ドイツからの協力も呼びかけられました。

日本人医師にとって耳の痛い質問も

質疑応答では、ノーベル平和賞受賞団体の反核医師の会（IPPNW）の医師から「我が組織の日本セクションはフクシマ事故に関してはあまり活発ではないが、なぜか？」との、日本人の医師にとっては実に耳の痛い質問もありました。

聴講したドイツ人の医師や物理学者の感想を聞きますと、現在の学問があまりにも専門化しすぎて、お互いの学識を共有して広い見識を得ることが難しい状況にあるので、良い勉強になったとの感謝の言葉がありました。

内部被曝についてはどこでも文盲状態

また、締めくくりに特別講義を主催したアイヒホルン教授もそれを裏付けるように、彼は昨年秋にドイツ放射線防護協会の会長ブルークパイル博士とともに日本を訪問し、多くの専門家たちの会議などに参加したが、内部被曝については日本でもどこでも文盲状態であることがわかった。「だから、わたしたちは読み書きを教わらねばならない/Laß uns alphabetisieren!」と結びの言葉を述べられました。それを側で聴くブルークパイル博士もうなづいていましたが、これは講演を聴いて学んだ人たちの気持ちの的確に表現していると言えるでしょう。

彼は、25年前から「日独平和フォーラム」などの市民活動を続けているわたしの古い友人ですが、他方で、先年まで学部長であったベテランの大学教授ならではの言葉であると思いました。



内部被曝問題は日本の喫緊の課題

というわけで、わたしも低線量内部被曝のいろは／ABCを学ぶために、上記の新しくできた市民と科学者の内部被曝問題研究会に加わることにしました。この問題は日本で喫緊の課題であるだけでなく、将来の世界平和にとって避けて通ることのできない重要課題であるからです。皆さんもこぞって参加応援をしてください。市民と科学者の集まりです。特に志のある日独の若者の参加を、わたしからも呼びかけます。若者たちにとってはそれこそ重要です。